土岐市美濃陶磁歴史館企画展

やきものの型

2017.6.2（金）～ 9.10（日）

やきものの製造過程には、採土・製土・成形・施釉・焼成といったいくつもの工程があります。成形方法に着目すると、東濃地域では、やきものの生産がはじまった飛鳥時代にはロクロによる成形が行われます。以降、やきものの成形はロクロによるものが基本となり、安土桃山時代から江戸時代初頭になると、型による成形技術が用いられるようになります。

左 2 点は岐阜県立多治見工業高等学校所蔵

型づくりのはじまり

美濃窯で型づくりの技術を用いた製品がみられるようになったのは、安土桃山時代から江戸時代初頭。この頃、京都や大阪では「茶の湯」が流行し、茶の湯の席で用いる茶碗や懐石用の食器などの需要が増しました。その需要を満たすために国内の窯場では茶陶が生産され始め、美濃窯でも独自の美を追求した茶陶「美濃桃山陶」を生み出しました。型による成形は、茶陶生産の中で多彩な表現をかなえるための技術の一つでした。

茶陶 美濃桃山陶

黄瀬戸★　瀬戸黒　志野　織部

茶陶と型づくり

食器

茶碗　水指　花入　向付

茶陶には、茶碗のほかに水指（みずさし）、懐石料理を盛り付ける食器、茶室に花を生ける花入など様々な器が含まれます。その中で、型づくりの製品は向付（むこうづけ）や鉢といった食器類にみられます。

★印は岐阜県立多治見工業高等学校所蔵

ココに注目！

茶陶が生産された時代の型は現存しているものがごくわずかで、当時の型づくりの技術の全貌は明らかとなっていません。しかし、大量に出土している型づくりの製品を見ることで、当時の型づくりの手法や製品の特徴を捉えることができます。

ロクロと型

底や角に
丸みがあるのが特徴

タタラと型

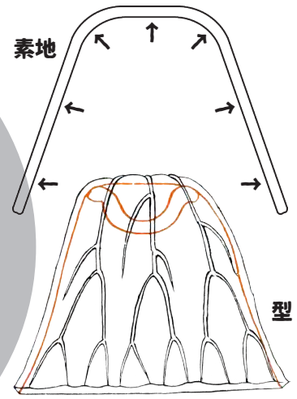
直線的で
角ばっているのが特徴

型づくりの製品には布目が残っています。型でかたちを整えたあとに取り外しやすいよう、型と素地との間に布を挟んでいたと考えられます。

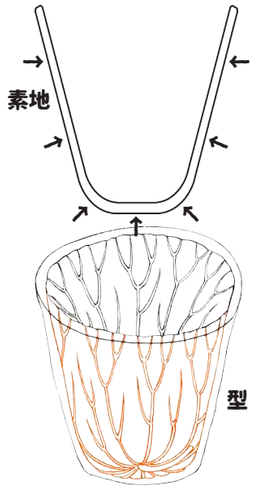
内型と外型

やきものの成形に用いる型には、製品の内側に型を押し当てる内型、製品の外側に型を押し当てる外型とがあります。あらかじめ型に模様を刻みこむことで、繊細な模様を凹凸で表現することもできます。茶陶生産に用いた土型はいずれも内型でした。

茶陶の型は内型！



内型



外型

陶器集説（国立国会図書館蔵）に加筆

主要参考文献

瀬戸市史編纂委員会編　『瀬戸市史　陶磁史篇 五』1993
楢崎彰一監修／美濃古窯研究会編　『美濃の古陶』1976　光琳社出版株式会社
岐阜県土岐市教育委員会・（財）土岐市埋蔵文化財センター　『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』2002
岐阜県土岐市教育委員会・（財）土岐市埋蔵文化財センター　『元屋敷陶器窯跡出土遺物整理報告書』2006
岐阜県土岐市教育委員会・（財）土岐市埋蔵文化財センター　『窯ヶ根窯跡発掘調査報告書』2006
財団法人出光美術館『志野と織部』2007
土岐市美濃陶磁歴史館　『美濃桃山陶を楽しむ - 美と技 - 』2015
財団法人岐阜県陶磁資料館『寛永の華　美濃で焼かれた初期御深井釉のやきもの』2010

凡例

・所蔵先の記載がないものは、全て土岐市美濃陶磁歴史館所蔵。

編集：（公財）土岐市文化振興事業団　鍋内愛美

土岐市美濃陶磁歴史館

土岐市泉町久尻 1236　TEL.0572-55-1245
入 館 料：一般 200 円（150 円）、大学生 100（70 円）、高校生以下無料
※（　）内は 20 名以上の団体料金
障がい者手帳をお持ちの方　一般 100 円、大学生 50 円
開館時間：午前 10 時～午後 4 時 30 分（入館は午後 4 時まで）
休 館 日：月曜日、祝日の翌日（ただし 7/17、8/12 は開館）

twitter 更新中

次回展示　特別展「お茶と美濃焼」

【会　期】平成 29 年 9 月 15 日（金）～ 11 月 26 日（日）
【会　場】土岐市美濃陶磁歴史館
※11/3 は入館無料

茶陶と型づくりいろいろ

茶陶生産に用いた型

六角

入隅四方

木瓜

土型

安土桃山時代から江戸時代初頭に茶陶を生産した窯跡からは土製の型が出土しています。そのかたちは六角や入隅四方、菊、木瓜（もっこう）があり、いずれも向付（むこうづけ）や皿などの食器類の成形に用いられました。

黄瀬戸小杯

志野向付

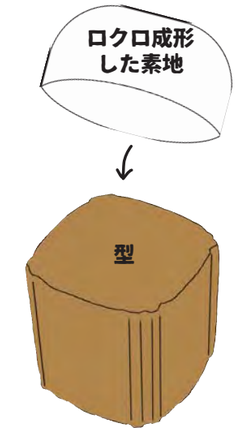
御深井釉皿

陶器集説（国立国会図書館蔵）

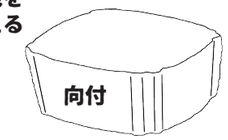
【タタラ】
薄い板状にした粘土のこと。タタラを作るには、手で叩いて伸ばす方法と、粘土の塊の両側に均等の厚さのタタラ板を重ね、タタラ板に沿って糸などで切り取る方法があります。

型づくりの技術

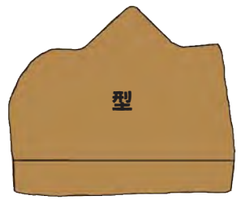
ロクロと型



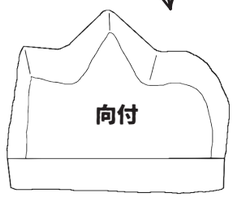
ロクロで成形した素地を型にかぶせて形を整える



タタラと型

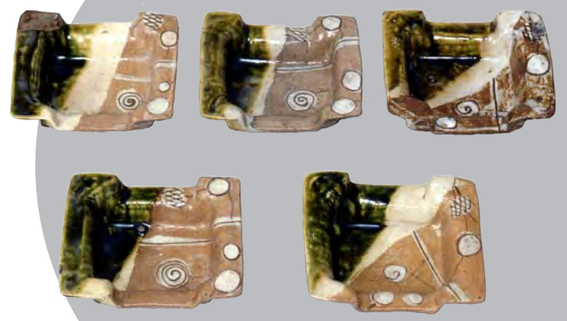


タタラを型に押し当てて余分な粘土を切り取る



型づくりの手法には、ロクロで皿形や碗形に成形した後に型にかぶせる方法と、タタラ（粘土板）を型に押し当てる方法があります。黄瀬戸など型づくりの初期の製品はロクロと型による成形で、タタラを用いた型づくりは織部製品の生産が最盛期を迎える頃に始まりました。
型による成形は、従来のロクロ成形からさらにひと手間必要となることから、懐石用の食器として同じ形の器を揃いでつくる中で、使う者を楽しませる多様な器形を生み出すための技術だったのではないでしょうか。

型づくりが生んだ粋



独特のかたちと赤・緑・白の色彩が鮮やかな鳴海織部は、タタラによる型づくりの技術が生んだやきものです。白土と赤土のタタラをつなぎ合わせて型で成形し、銅緑釉と長石釉の 2 種類の釉薬を掛け分けて、器の造形・色彩の両面の面白さを豊かに表現しています。

型づくりの茶陶の変化

黄瀬戸や志野では四方形など単純な形状だった型づくりの製品は、織部の生産が始まると一気に多様化しました。より複雑で角ばった器形や扇や貝をかたどった具象的な製品が生まれます。その後、織部の流行が過ぎ去って生産が始まった御深井（おふけ）釉陶器でも型づくりの技術は受け継がれます。葉形の器には葉脈を繊細に浮かび上がらせるなど、より具象的な表現が際立ちます。

より多様に！

より具象的に！

黄瀬戸・志野

織部

御深井

★印は岐阜県立多治見工業高等学校所蔵